

「歴史地理学紀要」二二二 は昭和五四年五月、東北地理学会との緊密な連繋のもと、仙台市を会場として開催された大会での諸氏の発表テーマ九篇の詳細な論述を収録して成っている。従来は大会で主題テーマを設定してはいても、同時に発表された自由論題とも称すべき、主題とは直接には関連しなくても、それらの各々は発表者が多年関心を注いで来られた力篇が多かった関係から、又頁数の余裕との関係から、両者併せて集録して来た例も寡くはなかつたのであるが、今回はすべてテーマに則したもののばかりに集中せられている。このことはテーマの如何による研究者数の多少と云う事情と相当関係するとしても、本学会が質・量共に、年毎に充実・発展を遂げつつあることの一証左として慶賀すべきではあるまいか。

内容的には河川水運と河港に関するもの、水利開発とその利用、河川湖沼沿岸の低地の微地形と生活と云ったことに集中されており、何れも執筆諸家多年の研究課題の一端であると共に、既に戦前から幾人かの研究者によつて手掛け初められていたものに加えて、一段と研究領域を拡げ、精緻に、史料・資料の博搜と吟味を加えて物されたものばかりであり、三―四年前の号に藤岡謙二郎教授も洩らしておられるように、二十年の過去の頃のそれと比べると、劃期的とは云い得ない迄も、

着実な進歩の迹は明らかに認められ、論稿間の格差と云ったものの殆んど見出されなくなつた事實は、単なる仲間褒めばかりではないようである。

人文地理学界一般、特に比較的若い年齢層の人々の研究には、唯目前に見える現実の姿ばかりに目を奪われ、その背景又は基盤であり、その現象のよつて立つ諸点についての考察の無視、あるいはそれに近い立場と見受けられるものの少くない現在からも、本紀要の諸論稿は頂門の一針に止らない意義をもつてであろうことを、本学会関係学徒の一人として、堅く信じ且つ祈りたく思うものである。

なお、本書の上梓にあたっては財団法人畠山文化財団から多額な助成金を賜わつたことを付記し謝意を表したい。

昭和五十四年十二月三十日

喜多村 俊 夫